

第2章 経済成長の光と影

第1節 東アジア各国の経済が成長した理由は何か

資料①で、日本の「集団就職列車」から上野駅に降り立った中学生や高校生の集団が、そして韓国の「秋夕帰省者」で溢れかえる人びとのようすが載っている。この写真から経済成長がもたらすものを容易に想像できる。(中国の経済成長については本文(p.216)に紹介されているだけである。

そして、この集団就職で上京した「当時の若い働き手は『金の卵』と呼ばれました」とあるだけで説明がない。この文章は p.216 の「経済成長期に都市に行った人びとの暮らしはどのようなものだったのか」のところで紹介すべき。なぜかというこの部分で日本のことが触れられていないためである。

というよりも、この節の「東アジア経済成長の共通の要因は何だったのか」、「東アジア各国はどのような国際的背景のなかで高度経済成長を遂げたのか」、「経済成長期に都市に行った人びとの暮らしはどのようなものだったのか」の構成に問題がある。「経済成長期に都市に行った人びとの暮らしはどのようなものだったのか」→「東アジア経済成長の共通の要因は何だったのか」→「東アジア各国はどのような国際的背景のなかで高度経済成長を遂げたのか」という構成にするとわかりやすい。

いずれにしても中国の高度経済成長の具体的叙述が少ないように思われる。

第2節 経済成長と生活—この壁の傷は何か

「東アジアに「公害」が投げかけた問題は何か」の資料③(p.222)は、「公害・環境問題の三国比較年表」とあるが、公害・環境問題の比較というよりも「公害・環境対策の比較」になっている。いわば「これだけしっかりと対策をしています」と言う年表になっている。それよりも、東アジア三国の公害の実状を具体的に記述し、さらには東アジアで共通する環境問題についての記述があるとよい。

p.224 では日本と韓国の問題点について触れられているが、中国のそれについては記述がない。また、韓国の反公害運動と民主化の関係についての「深い関係」(p.221)の内容が書いてあるとよい。

ここでも、「経済成長がもたらしたのはどのような社会か」、「東アジアに「公害」が投げかけた問題は何か」、「経済成長後にどのような「豊かさ」がとわれたのか」の構成を、「東アジアに「公害」が投げかけた問題は何か」→「経済成長がもたらしたのはどのような社会か」→「経済成長後にどのような「豊かさ」がとわれたのか」という構成にすべき。もちろん、記述の仕方に工夫をこらすことが必要ではある。

第3節 高学歴は将来の「幸福」を保障できるのか

資料①は具体的な、よい資料だ。「兵営のようです。どこの学校でしょうか」という問いがあるが、どこの学校かが問題なのではなく、読み手がどう思うかが大事。また、毛坦廠中高は「2万人」を超

える生徒数をどう考えるかも聞きたいところだ。

p.228 の湯島天神の絵馬は受験競争の激化の結果なのか？

p.230 の日本の学校教育・教員の第一の問題は教員不足なのではないか？

「高学歴は理想的な仕事を保証するのか」は、読んでもぴんと来ない。それは、「仕事」、それも高学歴を得た結果としての「仕事」に焦点を絞っているからだだろう。高学歴でなくとも「理想的な仕事」を得ることができる例を具体的に挙げていくと、結局「人生」観に行き着くだろう。東大(ソウル大、北京大)を出て官僚となっても国民から疎んぜられる一生では意味がない。

第4節 「イクメン」は「理想的な男性像」だろうか

力作だと思うが、資料①で英語が出て来ることが変だと思うかが分かれ目となる。

この節の特徴は、「日本ではなぜ「イクメン」という言葉が生まれたのか」で日本を、「中国は日韓に比べて女性の社会進出が進んでいるのか」で日本・韓国と比較しつつ中国を、「「キム・ジョン」への共感なぜ広がったのか」で韓国の家族像を記述し、最後に「「理想の男性/女性像」「ふつうの家族」とはどんなものか」で東アジアの家族について論じているのでわかりやすい。

ただ「中国は日韓に比べて女性の社会進出が進んでいるのか」という問いは「日中韓でいちばん女性の社会進出が進んでいるのはどこか」のほうがよい。

「「キム・ジョン」への共感なぜ広がったのか」は秀逸だ。ただし、LGBTQ はどうするのか。LGBTQ の家族も「ふつうの家族」だろう。